白河高校新聞

発行所
白河市南登り町54
福島県立白河高校
出版委員会
委員長　安藤　要
☎0248(24)1116

インターハイ予選
白高生、登龍の如く躍動

5月から6月にかけて行われた福島県高等学校体育大会において、どの部活動も大きな活躍を見せ、白河高校を盛り上げた。

また、剣道部、陸上競技部は全国大会への切符を手に入れ、7月から8月にかけて開催されるインターハイに出場する予定である。

インターハイ予選結果
（県大会出場以上掲載）（敬称略）

〈女子剣道〉
県大会団体戦　1位　全国大会出場
県大会個人　1位　柳沼ちかい　全国大会出場
3位　井上桃花
ベスト8　小林浩子

〈男子バレーボール〉
県大会　2位　丹野菜々子　東北大会出場

〈陸上競技〉
東北大会　やり投げ　4位　大谷泰基　全国大会出場

陸上競技部の大谷さん（左）と芝澤さん（右）

県大会　棒高跳び　4位　芝澤伶瑛　東北大会出場

〈水泳〉
県大会個人メドレー200m　5位　栗原美海　東北大会出場

〈男子弓道〉
県大会　団体戦　2位
個人　4位　小林海翔
7位　岡部人士

〈男子バスケットボール〉
県大会出場

〈女子バスケットボール〉
県大会出場

〈女子ソフトテニス〉
県大会　団体戦　3位

〈男子ソフトテニス〉
県大会　団体戦　3位

〈女子卓球〉
団体戦　県大会出場
シングルス　喬橋史佳　県大会出場

〈男子卓球〉
団体戦　県大会出場
シングルス　滝田大己、小山修也　県大会出場
ダブルス　稲川・滝田ペア　小山・白坂ペア　余西・根本ペア　県大会出場

〈男子バドミントン〉
団体戦　県大会出場
シングルス　山崎真宙　県大会出場
ダブルス　宮尾・高野ペア　山崎・遠藤ペア　県大会出場

〈女子バドミントン〉
団体戦　県大会出場
シングルス　市川愛菜、杉本美弥香　県大会出場
ダブルス　市川・田中ペア　県大会出場

剣道部

本校剣道部女子は6月4日から7日にかけて行われたインターハイ県予選大会に出場し、団体戦で2年連続8回目の優勝を決めた。また、団体だけでなく個人でも、柳沼ちかいさん（2―2）が優勝を果たした。

大会会場での様子を聞いたところ、「会場にいた全員が緊張していて、張り詰めている感じだった」と語ってくれた。「決勝で勝利できた時には率直に嬉しかったし、何より第1の目標を達成できてよかった」とも語ってくれた。

そんな彼女達に、これから剣道を続けていくのかと聞くと、「これからも続けていきたい。自分の剣道を突き詰めていきたい」という答えが返ってきた。今回のインターハイ全国大会だけでなく、これからの彼女達の活躍に大きな期待が寄せられる。

笑顔で勝利を飾る女子剣道部

陸上競技部

本校陸上競技部の大谷泰基さん（2―2）は、6月19日から22日にかけて行われたインターハイ東北地区予選大会において、やり投げで4位という輝かしい成績を残した。

大谷さんは「日々の練習では、骨折している分、自分なりに、周りと差をつけるために工夫を凝らし、予定を立てて全力で練習した」と話してくれた。また、骨折により、大会前にやりをほとんど投げられなかった。しかし、親に感謝しつつ、インターハイに行けなかった友人の気持ちを背負って、自分のしてきたことを信じ、1回1回投げたそうだ。彼が大会で結果を残せたのは、骨折という逆境と真摯に向き合い、工夫を凝らして全力で練習に臨んだ姿勢と、自分だけでなく自分の周りの人や、自分を助けてくれている人のことを大切にしている気持ちがあったからである。コロナ禍による応援規制で、拍手のみが響く会場で全国大会の出場を決めた時、心の底からほっとしたそうだ。

7月28日から8月1日にかけて行われる予定の全国大会で、骨折を乗り越えた彼の活躍に期待が高まる。

論説
中庸から外れる選択

「中庸」という言葉がある。広辞苑で引くと、第一義に「かたよらず常に変わらないこと。不偏不倚で過不及のないこと」と出てくる。つまり、「極端な考え方をしたり意見をコロコロ変えたりしない。中立であり、多すぎたり少なすぎたりしない」ということだ。この言葉は中国の孔子が論語の中で説いたのが始まりと言われている。

孔子が生きていたのは春秋時代であるから、実に約2500年もの間人々の中に生きてきたことになる。当然、この孔子の教えが価値のないものと見なされたのであれば現在にまで伝わることはなかった。言い換えれば、多くの人々が支持し続けてきたからこそ、今日の私たちもこの言葉を受け継いでいるのだ。歴史がこの言葉の価値を証明しているとも言える。

人間は中庸から外れることで失敗も犯してきた。例としてルワンダ虐殺が挙げられる。ルワンダには大きく分けて多数派のフツ族と少数派のツチ族が存在している。1900年頃からのルワンダはドイツやベルギーによって支配されることとなり、支配の過程でツチ族が優遇された。これによりフツ族の不満は蓄積され、後に爆発する。フツ族がツチ族の大量虐殺を行ったのだ。原因は、支配した諸外国が片方の民族のみに便宜を図ったことにあるのは明らかだ。この統治の仕方が中庸から外れていたのは言うまでもない。

自然科学系の話もしよう。可逆反応における平衡状態では、反応に関わるある物質の量が増えると、その物質を減らす方向にその反応は進む。広く捉えるとこれも中庸の一つの例と言えるだろう。特定の物質の急激な増加を防いでいるという点に中庸と一致する精神を見いだすことができる。自然も中庸を支持しているのだ。

ここまで中庸の大切さを示してきたが、私たちは常にこれを意識していれば失敗することはないと言い切れるだろうか。答えは否である。人間は時には思い切った決断をする必要がある。その根拠を以下に示そう。

一つ目はかつての超大国であるソ連だ。ソ連の最高指導者であったゴルバチョフ氏は、ペレストロイカと呼ばれる改革を行った。だがそれは失敗に終わる。ソ連共産党内部の保守派と急進改革派の両方から支持を得られなかったからだ。ゴルバチョフ氏にその意識があったかは分からないが、結果としてどちらの考え方にも偏らない政策となってしまったが故の結末であろう。彼の理想は素晴らしかったのかもしれない。しかし、どちらのだに収束の気配はない。結果論にはなるが、感染対策と経済の活性化の両立を目指さず、感染対策のみに集中していれば状況は好転していたのではないかと考えざるを得ない。強力な感染対策としてロックダウンを行わずに、諸外国と比較して感染者数を少なく抑え込んでいることは評価すべきである。一方で、医療の逼迫が問題となっていることは紛れもない事実なのである。日本政府の行ってきたどちらにも偏らない、いわば中庸的な対策には再考の余地があるとの印象を受ける。

だが、「中庸＝中途半端」あるいは「中庸＝不必要」というわけでは決してない。この点を誤解してはならない。中庸の価値は説明した通りである。さらに、この新聞の前回の論説でも偏らないことの大切さを論じている。つまり我々は、たった今この瞬間が中庸を意識すべき時かそうでないかを的確に判断する必要があるのだ。

話は少し逸れるが、先日私が見たテレビ番組で日本の歴史教育が大きく変わると解説していた。暗記物から自分の頭で考えるものに変化するという。この変化に私は賛成だ。なぜなら歴史というものは暗記するためにあるのではなく、学ぶことによってよりよい未来を創り出すためにあると考えているからだ。今回の論旨に置き換えると、我々は歴史を学び自分の頭で考えることで、中庸を行くべきか否かの決断が適切にできるようになるのである。

克服することが困難な課題が現れた際、時には思い切った決断をすべきではないかと私は考えている。もちろん、歴史を学んで失敗の無いように努めることは前提だ。今回挙げた例で言えば、ペレストロイカの背景の一つにはソ連経済の深刻な停滞があった。コロナ禍も日本の国難であるのみならず全世界が直面している危機である。

中庸を保つことは大切だ。しかし、あえてそこから外れることが大きな収穫をもたらす場合もあるだろう。特に、我々高校生が今後の人生で幾度となく困難に直面することは想像に難くない。その時の適切かつ大胆な判断が私たちをより良い未来へと導いてくれるかもしれない。仮に失敗したとしても、その失敗からは新たな学びが得られる。失敗はそれから先の人生の糧にすることができるのだ。

（安藤　要）

新生徒会が発足
役員、意気込み語る

6月9日、新型コロナウイルスの影響で、教職員、生徒の全員がマスク姿という異例の状況の中、新生徒会役員の立会演説会が行われた。6月という例年通りの開催時期も、1、2年生からすると初めての経験であり、立候補者達は皆、いくらか緊張した面持ちで壇上に上がった。

今年は会長、副会長、会計が信任投票となった。書記は定員3のうち、立候補者が5名という激戦となり、壇上では、候補者一人一人が自らの思いを熱く語った。翌日行われた投票の結果、信任投票となった会長、副会長、会計の三つの役職で全員が信任され、書記は去年からの続投である松井響希さんを始めとする3名が当選した。

今回の生徒会選挙において、立候補者10名の内、男子の候補者が1名のみという、偏った男女比の中で投票が行われた。女子生徒の意見を取り入れやすくなった一方で、どれだけ男子生徒の声に寄り添えるかが問われている。また、演説中のマニフェストにおいても、購買へのアイスケースの設置や、女子更衣室の増設など、革新的な意見を挙げる候補者が目立った。新生徒会が発足した今、どれだけ生徒の意見を取り入れ、自身の公約を守り、うまく実現していくのかが注目されている。

新生徒会役員に意気込みを尋ねるインタビューを行った。

●生徒会長　寺山　華
演説で述べた通り、アンケートを積極的に実施し、一つでも多く生徒の希望を実現できるよう、話し合いを重ねていきたい。また、男子が1人しかいないので、うまく意見を取り入れながら、これまでにない議論を交わしていければ良い。

●副会長　穂積真緒
生徒会に関する経験が浅く、プレッシャーも感じるが、白高生としての自覚を持って、どんなに小さな事でも全力で取り組んでいきたい。今年は登龍祭や記念行事など、やるべき事が沢山あるため、一つ一つに対して真面目に取り組んでいきたい。

●書記　松井響希
石川うらら
宗田大河
今年の書記は立候補者が多く、限られた生徒が選挙で選ばれたため、その自覚をしっかりと持ち、職務に専念していきたい。演説で示した公約をきちんと実現し、書記として記録するだけでなく、意見を積極的に出して議論に参加していこうと思う。

●会計　森本紗椰
戸部有美子
鈴木心菜
新型コロナウイルスの影響で、十分な生徒会活動ができるかどうかわからないが、限られた時間を有効に使い、生徒の意見を実現できればと思う。また、スポーツ大会や登龍祭、来年の100周年記念事業など、コロナ禍でも確実に行事を実現させていきたい。

登龍の睛
「文化」とは

今年度秋に開催される文化祭に向け、クラスや部活動において仮装や企画の準備が着々と進められているが、「文化」の意義について考えたことはあるだろうか。ここでは二つの観点から明らかにしようと思う。

まず、定義について考える。イギリスの人類学者タイラーは、世界で初めて概念について言及した人物として有名だが、明確に定義しているわけではない。加えて「文化」は様々な学問分野で定義されている。つまり、「文化」の定義は多様性で溢れているのだ。

次にcultureの語源から考える。語源はcultivate「農耕」だ。その昔、人類は採取社会から農耕社会へと変遷を遂げた。「未来のために土を耕し木の実を種として植える」つまり、持続可能な未来のための人類の第一歩こそが文化の始まりなのだ。一人一人の意識の中に「文化」が存在していれば、文化祭の成功はもちろん、豊かで持続可能な社会も実現できるのではないか。ぜひこの機会に自分にとっての「文化」を見つけてほしい。

（菊地未柚）

まもなく登龍祭
校内各所で準備進む

3年に一度実施される白河高校の文化祭、「登龍祭」。今年度は9月3日(金)～6日(月)の4日間の日程で行われる。登龍祭の開催が迫る中、実行委員会を中心として各所で準備が進んでいる。

今年の登龍祭のテーマは、「Dreams come 登龍」に決まった。「夢を実現させる」という意味と、白河高校のシンボルでもある「登龍」の2つの意味を掛けた言葉だ。テーマ案の応募は39件あり、その中から円谷隆政さん（3―4）のものが選ばれた。「みんなの夢が登龍祭で叶いますように」とのコンセプトを表現したという。アーチデザインについても、白高生による公募が行われた。

日程の詳細は次の通り。9月3日(金)、開祭式・校内ステージ発表。9時から開祭式が行われ、9時50分からはステージ発表が実施される。9月4日(土)、仮装行列。スタートは11時45分。各クラス20名までが仮装をし、白河市内の約3kmのコースを練り歩く。雨天時は大体育館での仮装発表となる。9月5日(日)、一般公開。10時から15時までだが、新型コロナウイルス感染症の影響により入場者の制限が行われる見込みだ。6月18日時点では、生徒の家族2名までに入場を制限し、前半、中盤、後半で入れ替え制にする案が浮上している。この案について、文書により保護者からの意見も募っている。また、飲食物の提供は中止が決定した。9月6日(月)、閉祭式。11時45分からの予定。仮装行列、クラス・団体企画、クラス企画ポスターの各種コンテストの表彰も行われる。

実行委員会委員長は、海老名圭太さん（3―4）が務める。「登龍祭は3年に1回のビッグイベント。誰にとっても一生の中で最初で最後の高校の文化祭になるからには、白高生全員が楽しめるようにしたい」と出版委員会の取材に対して抱負を述べた。また、白高生に対しては「このような状況下でも、皆さんが大いに満足できるような登龍祭にできるように尽力するつもりだ。自分にできることは何でもやるぐらいの決意でいるので、私を信頼してついてきてほしい」と力強くメッセージを語った。

登龍祭に向け制作された看板

プラタナス

岡潔という数学者を知っているだろうか。彼は一年中長靴を履き、夏に長靴は暑いからと冷蔵庫で冷やしてから履いていたそうだ。そんな奇行も多い岡は一生涯をかけて「多変数複素函数論」について研究し、大きな業績を残した。当時、その業績のあまりの偉大さにヨーロッパでは「岡潔」はある数学者集団のハンドルネームだと噂されたほどだ▼岡は「数学のもとになるのは頭ではない、情緒だ」と言った。岡曰く、「情緒」とは「スミレの花を見て、美しく感じる心」である。また、人間の中心は「情緒」であるとも言った▼岡は何故そこまで情緒を重んじたのだろうか。これは筆者個人の考えだが、「情緒」とは人間が世界の物事と接するときにそれら二つを繋ぐ存在だ。その「情緒」を育むからこそ、自分と自分が観察する対象物との関係がよく見えるようになり、物事の本質が見えるようになる。「情緒」の力により、五感で感じられないようなものであっても考えられるようになるのだ。そうすることで良い学問ができるのではないだろうか▼岡は大学で教鞭をとっていた頃、彼の生徒を連れて美術館に行っていたそうだ。そうして美に触れることで生徒の「情緒」を育んでいたのではないだろうか▼筆者は数学の問題を解いていて行き詰まったときには散歩をする。そうすると、しかるべき指針や解法が見えてくるのだ。散歩をすることで、自然に接し「情緒」が育まれたのではないだろうか▼ところで、現代の私たちの多くはスマートフォンから手を離せないような生活を送っている。どこかへ旅行などをしても、景色を目で見るよりもスマートフォンで撮影し、SNSなどにアップロードすることに熱中してばかりな人もいるだろう。スマートフォン越しに見る景色では、自然と相対しているとは言えないのではないだろうか。それでは「情緒」を育むことは難しいだろう▼スマートフォンを注視してばかりいると、自ずと周りの物事には目がいかなくなる。それでは学問などできない。情報化社会がうたわれている現代だが、スマートフォンなどを駆使して多くの情報を手に入れることが重要なのではない。むしろ「情緒」を育み、思索することで物事の本質を見抜こうとすることこそ重要なのではないのだろうか。

（吉田祥平）

地域密着特集
白河を興す演劇塾

しらかわ演劇塾の皆さん

2014年に、白河市に根差した演劇文化を興すために「しらかわ演劇塾」が発足した。現在、年齢や性別などを問わず地域の人々が集い、活動している。

この演劇塾では、劇団として演技を学ぶことだけではなく、「人間力」を育てることも重視されている。子ども達は、学校ではなかなか得られないような発想力や表現力、コミュニケーション能力といった力を養うこともできるのだ。大人は、自らを表現する、人々と交流するといったことも目的としている。劇団員のひとりひとりが自分の個性を発揮できる「多様性」に満ちた劇団なのだ。

この劇団では、この白河市だからこそつくることができるものを、白河市に住む人々によって発信しようとしている。これまでのテーマとして、除染される庭の花や戊辰戦争、震災などが挙げられる。どんな劇であっても、必ず希望を持てるような終わり方にするそうだ。この閉塞感あるコロナ禍でも人々が笑顔になれるような劇を目指して活動している。

実際に練習風景も見せてもらった。そこでは、皆が一室で和気あいあいと与えられたテーマについてコミュニケーションをとっていた。そしてそれに基づいて実際に演技をしていた。演技が終わると皆で感想を話し、より向上しようと切磋琢磨していた。劇では、役者どうしでの優劣は決まらず、それぞれが協力し成長していく。また、役者だけでなく、舞台裏の作業も欠かせないものだそうだ。

次回作は、2月に予定されている。そこでは観客に「白河の演劇がここまでできるのか」と思ってもらえるような大きな転機となる作品にしたいという。日々初めてのことに挑戦しているため、未来の可能性に胸を躍らせているという。その期待を皆で共有できるような場をつくっていきたいという。

ここがすごい文化部
第1回　理化学研究部

理化学研究部は本校南校舎2階化学実験室を活動場所とし、部長の清水隆之介さん（3―1）と20名の部員で活動している。今回は去年同部で活動した、新田昂史さんと三輪一冴さん（どちらも2―1）、塚本清美さんと水野優樹さん（どちらも2―2）、また副顧問である相山真希先生にもインタビューを行った。4人は去年、福島県高等学校生徒理化研究発表会で『サイコロの重心と出目の偏りに関する研究』という論文で物理部門の優秀賞に入賞している。大会で、自作のパワーポイントを用いて、サイコロの重心の反対の面である「2」の面が出やすいことを実験を繰り返して突き止めたことを発表した。インタビューでは、研究で大変だったこととして、サイコロを用いた実験の試行回数が5400回に及び、実物のサイコロが壊れたことを挙げてくれた。

また、副顧問である相山真希先生は今後研究したいこととして、生物の実験において多用されるユキノシタが脱色される条件を調べたいと話した。本校の理化学研究部では伝統的にサンショウウオを研究対象としており、例年であれば野外にサンショウウオの採取に行くこともあるようだ。同部では、物理や生物などの分野に関わらず、部員が興味を持ったテーマの研究に参加している。4人にインタビューした際には、先輩や先生はとても優しく親しみやすいので、やる気のある生徒に是非入部してほしいと語ってくれた。

2年生修学旅行
予定通り関西へ

今年度の修学旅行は、奈良・京都・大阪の3県を10月5日(火)から8日(金)にかけて巡る予定だ。行程は年度始めに発表されたものから大きな変更はない。行程によると、初日の5日(火)に奈良の神仙境・奈良公園・奈良薬師寺を訪れ、6日(水)に京都で班別自主研修を行う予定だ。7日(木)には平等院鳳凰堂と大阪のユニバーサル・スタジオ・ジャパン、最終日の8日(金)には大阪城を訪問する計画だ。

昨年度の修学旅行は、新型コロナウイルス感染対策の影響を受け、関西方面から北東北方面を中心とした行程に変更された。また、今年度も他の高校では関西地方から三重県や鳥取県などへの行程の変更や、実施時期の変更などが検討されているが、本校では当初の計画通り実施する見通しである。

一般社団法人日本旅行業協会が今年1月に発表した国内修学旅行のガイドラインは、生徒に対する感染防止対策の事前指導や参加者の家族も含めた健康観察を呼びかけている。

いまだ新型コロナウイルスの脅威は続いており、遠方への旅行は懸念されている。修学旅行の成功には、各個人の徹底した対策が今一度求められている。

マラソン大会
2年ぶりに開催

女子4km、男子8km走る

新型コロナウイルス対策の為に去年は開催できなかったマラソン大会だったが、今年は例年通り開催された。今年に入ってもいまだに猛威を振るい続けている新型コロナウイルスの影響で、昨年に続いて行事が中止となった学校も少なくない中、例年通り開催することができたのは大会関係者の尽力のおかげだ。沿道には応援する人々も見受けられ、2年ぶりのマラソン大会に挑む姿勢は様々であったが、本番は晴天にも恵まれて気持ち良く走ることができた。

〈大会結果〉（各学年1位）
1年生
男子　緑川侑真（4組）
女子　風岡莉乃（1組）
2年生
男子　安藤圭吾（2組）
女子　栗原美海（6組）
3年生
男子　吉田慶希（4組）
女子　石井美波（6組）

祝　入学
238名が仲間に

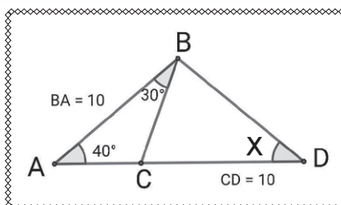
4月8日、本校大体育館において入学式が挙行され、新たに238名が白河高校の仲間として加わった。晴れ舞台である入学式も、例に洩れず新型コロナウイルス感染症の影響を受けた。国歌の斉唱はCDに録音されたものを聞くのみとなり、新入生呼名の際の返事も省略された。また、保護者への検温も行われるなど、感染対策が行われた中での実施であった。

白石文夫校長先生は、白河高校が1922年創立の伝統校であることを紹介したうえで、「来年秋に創立100周年の節目を迎える記念すべき年の入学生として、新たな目標の実現に向けて自分自身を磨き続けることを期待する」と式辞の中で述べた。

また、新入生代表の森詩織さん（1―1）は、「白河高校が掲げる文武両道を目指し、学業にも、部活動にも、向上心をもって精一杯励んでいきたい。仲間と切磋琢磨し合い、それぞれの目標実現に向け、ひたむきに努力し続けることを誓う」と新入生誓いの言葉を述べた。

出版委員からの挑戦

角Xの大きさを求めよ。



白河だるま総本舗 14代目当主に聞く

「衰退産業」とは言わせない

白河だるまを守るために

白河地域のナンバープレートにもなっている伝統工芸品「白河だるま」。伝統的なだるま製造の他、企業とのコラボ商品にも積極的に取り組む白河だるま総本舗「渡辺だるま店」を継ぐ、14代目渡邊高章さんに、お話を伺った。

Q　まず、お店の創業について教えてください。

A　もともとは白河城下町で屋根瓦を作る職人でした。そこでの瓦を作る技術からだるまの成型技術を作り出しました。そこからの歴史で言うと、14代目の私でおよそ300年になりますね。

Q　大変なことや、やりがいは何ですか。

A　これは私が高校を卒業後に上京して気づいたことなのですが、白河において白河だるまは知名度がありますが、地域の外に出るとそこまでの知名度はないんですよね。白河だるまは「衰退産業」であるというイメージがどうしてもついてしまうことが大変なことです。ですが逆に、その衰退産業をどうやって盛り上げていくか、どう知名度を上げていくかを考え実行していくことがやりがいでもあります。

Q　渡辺だるま店さんのだるまは、人気キャラクターやアニメなどとのコラボ商品でも有名ですが、作るきっかけがあったのですか。

A　上京した際に、だるまに興味をもってくれた友人が、女性向け雑貨店とのコラボだるまを購入してくれたことです。普通のだるまよりも、デザインが新しかったり有名な企業とのコラボであったりすれば人が欲しがってくれると学びました。

Q　上京されて気付いたことなどはありますか。

A　都会は白河に比べて、時の流れがとても速く感じられましたね。やはり都心は競争社会なのだと改めて実感させられました。

Q　新型コロナウイルスによる影響はどのようなものがありましたか。

A　コロナには、強制的にさまざまなことを変えさせられました。だるまの客層は主に観光客です。白河だけでなく日本各地の観光地に商品を卸しているので、回復が見られない状況は非常に大変です。ですが、それを嘆いていても何も始まらないので、自社企画の商品を増やし、お客さんの顔が見られるような商品を提供していくのが、今の私たちにとって重要なことだと感じています。

Q　毎年建国記念の日に開催されている白河だるま市が、昨年度は中止になりました。イベント開催が困難になっている現状について、どのように考えていますか。

A　正直、大人達の都合で開催できないのは不服です。地域でのイベントは率先して行ってもいいのではないかと思います。

Q　グローバル化が進む世界の流れと伝統文化をどう結びつけていくべきと考えていますか。

A　食べ物やIT技術など人間が生きていく上で必要になるものは国際競争していくべきだと思います。逆に、ローカルなものは地域にどれだけ密着できて、よりローカライズできるかが重要です。基本的に、まずこの地域に何が必要なのかを考えて、次のステップで他の地域に目を向けていけばいいと思います。

Q　渡邊さんにとって、白河だるまとはどのような存在ですか。

A　アイデンティティーの一つです。だるまのような伝統産業は、放っておくと簡単に消えてしまい、流れが来ると割と簡単に広まるものです。ですが逆の時は頭を使ってもがく以外に方法はありません。地域のアイデンティティーでもあるので、10年後100年後までだるまが残っていけるような地域づくりをしていくのが、私たちの役割だと思っています。

◆

7月8日に、渡辺だるま店が2018年から建築を進めてきた観光施設「だるまランド」がオープンした。職人の絵付け見学コーナーやフォトスポットなどがあり、幅広い世代が楽しめる施設になっているそうだ。これからの渡邊さんの挑戦から目が離せない。

お話を伺った渡邊高章さん

本校野球部と渡辺だるま店さんとのコラボだるま

白高、歴史を重ねて

福島県立白河高等学校（以下、白河高校）は1922年に創立され、来年度で創立100周年を迎える。私たちが白河高校で過ごす時間は限られているので、その歴史を肌で感じることは少ないかもしれないが、およそ100年間の改修工事の痕跡を校舎から見いだすことで、校舎の歴史の一部を感じることができる。

白河高校は1922年、当初は旧制中学校（1947年に教育基本法が施行されるまで、男子に対して中等教育を行った）として創立された。現在、私たちは白河高校で起きた出来事を全て知ることは不可能であるが、創立当時から現在までの校舎の変遷の様子を知ることはできる。

一つ目に図書館の工事跡に注目しよう。図書館の入り口から少しだけ廊下側に数歩下がって図書館内を眺めてみてほしい。すると、図書館の天井が廊下や教室の天井よりも高いことがわかる。図書館は、1936年に北校舎の東端2階を大規模に改築して作られたため、天井の高さの違いはこの時に天井板を外し空間を拡張した際の名残りであると考えられる。

二つ目に南校舎と北校舎の違いに注目しよう。これは特に、南校舎と北校舎をつなぐ渡り廊下でわかりやすいのだが、天井が南校舎と北校舎で異なっている。具体的に言うと、南校舎がトラバーチン模様と呼ばれる吸音性のある天井、北校舎が吸音ボードと呼ばれる、こちらも吸音性のある天井である。ちなみにトラバーチン模様の天井は大理石を模している。さらに、校舎から出て旧体育館側から校舎を眺めると、南校舎と北校舎で屋根の形が異なっていることに気づくはずだ。この違いは、1997年9月28日に竣工した南校舎大規模改修工事の痕跡である。また、同年3月には家庭科総合実習室が建設されている。

ここで、校門の前まで戻ってほしい。校門から入ってすぐの両側には、2本の木がそれぞれに生えていて、その根元には立ち入り禁止の柵が立っているはずだ。実は、柵の役割は、木を守るためだけではなく、その奥の石垣を守る役割もある。この石垣は旧制中学校時代から残っていると言われ、この学校で最も歴史を持つものである。

その他主な改築工事は、1971年の登龍会館、1982年の第2体育館の新築だ。また、校門にある赤松は、1999年に植栽されている。また、工事ではないが、1974年に学校祭が登龍祭となった。

このように、白河高校では幾度も校舎の改築がされてきた。最近の工事では、白河高校空調設備整備（電気）工事が記憶に新しいだろう。私たちはこの白河高校で3年程しか学ばないが、私たちの学び舎は、工事という歴史を積み重ねながら、未来に受け継がれていく。

旧体育館側から見た校舎

登龍の睛

グローバル化する伝統文化

世界的にグローバル化が叫ばれる中で、各国の伝統文化については早い段階から、世界中で他国の文化を体験することが可能であった。日本では、例えば百貨店の外国フェアや輸入雑貨店など、他国の伝統文化に触れる機会が多く、他国の文化を取り入れてきた歴史を持つ。一方で、日本の伝統文化はグローバル化の波に押されつつある。他国の文化が若者の間で流行し、郷土文化の一部は存続が危ぶまれている。

しかし、私はグローバル化が伝統文化にとって必ずしもマイナスに働くとは限らないと考える。むしろ、うまくグローバル化の波に乗ることができれば、今まで以上に伝統文化を守ることができるだろう。外国人には日本の文化に興味を持つ人が多くおり、中には日本人より知識を持った人もいる。そうした人々によって外国人の視点で情報が発信される。すると私たち日本人は、新しい視点から自国の文化を見ることが許されるのだ。

要するにグローバル化とは、なんでも他国の文化を取り入れ、自国の文化に上塗りするということではなく、他国と自国の文化を自国民、他国民の壁を越えて共に見比べ、それぞれに良さを見つけていくということだ。そうすることで、日本のみならず世界の伝統文化それぞれが守られ、文化における真のグローバル化が達成されるのだ。

（三澤真澄）

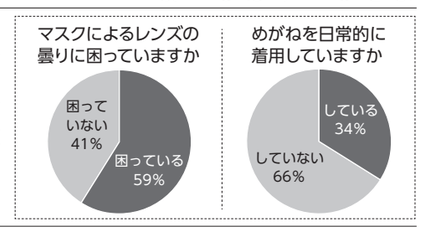
レンズが曇る 悩みに最適なマスクは？

白河高校で眼鏡を日常的に着用している生徒は全体のおよそ3分の1、その半数以上はマスクによるレンズの曇りに悩みを抱いている。コロナウイルスの感染予防対策としてマスクは欠かせないものではあるが、レンズが曇ってしまうことは不便この上ない。

レンズの曇りは、結露に起因する。冬のみならず、夏であっても冷房が効いた教室から廊下に出たときなど、レンズと空気の温度差によって曇ってしまうため、季節に関係のない悩みの種である。

そこで我々は特に使用されていると思われるマスクを選定し、どれが曇りにくいかを検証した。不織布マスク、布製マスク、ガーゼマスク等と眼鏡を着用し、曇りにくさや着け心地を判断した。

結論から言うと、布製立体マスクとガーゼマスクが曇りにくいという結果が出た。前者はレンズが曇らないことに加え、着け心地が良い。布製であるが故に何度も洗って使用できるため、経済的にもメリットがあるだろう。一方後者も曇りにくいのであるが、これは頬や顎などから空気が漏れ出ていることで、不織布マスクなどとは相対的にレンズが曇りにくくなっているのだと考えられる。つまりレンズの曇りを無くしつつ、感染予防を徹底したい場合には、布製立体マスクを着用することが好ましい。とは言え、マスクのサイズが不適切な場合は感染予防としては不十分であるため、自分に合ったマスクを選ぶことが肝心だ。



コロナ対策

ワクチン接種の現状とは

厚生労働省は、新型コロナウイルスワクチンの接種券を、65歳未満の一般国民向けにも6月中旬から発送するよう自治体に伝えた。実際には、高齢者への接種を優先するため、終わり次第の接種となる。また、高齢者の接種が完全に終わりきらなくても、基礎疾患等がある人の接種を開始することを認めた。これは、順番を厳守すると、遅れが生じる可能性があるためだ。

6月13日現在、日本全国で約1700万人、人口全体の約14％の国民が1回目の接種を受けている。しかし、他の先進国を見るとアメリカは53％、イギリスは62％、ドイツは48％、フランスは45％と接種開始が他国と比較して遅れた日本を接種者数で大きく上回っている。

いまだ高齢者の接種が完了していない自治体がほとんどであるが、中にはすでに65歳未満の市民への接種を始めている自治体も存在する。そのなかのひとつである相馬市は6月1日、19歳から64歳の市民への集団接種を始めた。

市は意向調査で接種を希望した人を年齢や基礎疾患の有無で分け、市が地区別に日時を指定して接種する独自方式を採用し、また、65歳以上、以下への接種を同時進行させることで迅速な接種を実現している。

白河市でも、6月13日現在、市全体の高齢者の56％である約1万人が1回目の接種を終えた。市は、市民に郵便はがきでの事前アンケート調査を実施し、希望者優先で年齢が高い人から接種する方式を採用している。

市の接種会場は、白河市中央保健センター、白河市国体記念体育館、大信農村環境改善センター、表郷、東地区の各保健センターの計5ヶ所となっており、白河市のどこに住んでいても手軽に受けられるようになっている。各会場の接種までの手順は、受付、検温、待機、予診票確認、待機、予診、接種、予防接種済証の交付、健康観察となっており、会場が混雑してしまうのを防ぐため、それぞれの手順ごとに場所を分け、流れ作業のように効率的に接種を行うことで、平日1日平均400から450人の接種を完了することができている。

政府はこれまで、ワクチン接種を来年の2月までに完了させることを目標としていたが、菅首相は6月9日、「10月から11月にかけて希望する方すべてで終えることを実現したい」と接種完了時期を大幅に繰り上げることを表明した。これに合わせて白河保健センターは、白河市は現在はまだ65歳以上の市民のみの接種であるが、7月上旬には12歳から64歳の接種を開始し、11月までには完了したいと話している。また、今後は高齢者用施設や民間企業などでもワクチン接種が始まるとされており、接種のスピードは徐々に加速していくと予想される。

接種会場の国体記念体育館

キャンバスに表れる 美術部の個性

本校美術部員は、白河市立図書館で4月24、25日に開催されたティーンズらくがき会に参加した。

このイベントは、図書館の10周年記念事業と、主に10代をターゲットとした話題作りを目的に、来年3月末までに計4回行われる予定だ。今回白河、白河旭、白河実業の三つの高校の美術部員が、図書館2階のティーンズコーナーの窓ガラスに絵を描いた。本校からは2日間、3年生の部員が参加した。参加者は、各パネルでそれぞれの好きなものやフォトスポットなど、子どもが楽しめるような絵を、思い思いに趣向を凝らし描き出した。2日間でティーンズコーナーの窓ガラスは絵で埋め尽くされ、情緒豊かな空間へと変わった。

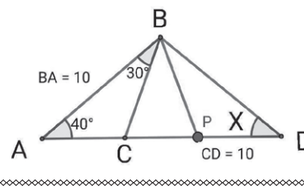
美術部部長の山田蒼さん（3―1）は「他校の生徒との交流があり楽しかった。窓ガラスに絵を描く経験は貴重だった。垂直な場所に絵を描くのは大変で、腕や足が疲れた」と話した。今回のイベントで描かれた絵は7月23日まで展示され、24日に新しい絵が描かれる。

9月に行われる登龍祭では、部員が福島県総合美術展覧会に出品した絵が展示される。「登龍祭で、普段はなかなか見ることができない美術部の作品を多くの人に見てもらいたい」と部員は期待を寄せている。

図書館で活動する山田さん

出版委員会からの挑戦　解答

①図のように線分BPを三角形BCPが二等辺三角形になるように引く。
②角BCP=70°であることから角CBP=40°であることが分かる。
③よって△ABP≡△DCBとなる。
④故にX=40°



クローズアップ白高生

被災地に音楽を

東北ユースオーケストラは被災三県（岩手県・宮城県・福島県）で演奏活動をしている小学校・中学校・高校・大学の学生に音楽家の坂本龍一さんが声をかけ、結成された。この東北ユースオーケストラに所属しているのが海津洸太さん（3―3）である。彼が音楽を始めたのは小学4年生の時、親に勧められて学校の吹奏楽部に入ったそうだ。初めは好きではなかった音楽も、9年間続けた今では大好きだと彼は語った。

音楽が彼に何をくれたのかを聞くと、「出会い」という言葉が出てきた。彼の所属している東北ユースオーケストラは東日本大震災で津波の被害にあった楽器を修復し、その楽器で演奏会をしようとプロジェクトが立ち上げられたことが設立のきっかけだそうだ。その楽器の中で修復されたグランドピアノは現在、「奇跡のピアノ」と呼ばれている。そして、東日本大震災の被害に遭い、仮設住宅で暮らしている人々の元へと赴き演奏をするだけではなく、現地の人々と現地のことについて話し合うなどの活動もしている。また、その活動は震災の被災地にとどまらず、様々な地域でも行っているそうだ。オーケストラ内や被災地の普段は会うことのできない人々との交流、そこで得られた経験を彼は大切にしているのだ。そんな音楽活動も、コロナ禍においては自粛ムードが漂っている。彼自身、音楽活動はコロナ禍において問題の多いものだという認識があるそうだ。事実、ユースオーケストラの演奏会は2年間開催できていない。

本校吹奏楽部の昨年の定期演奏会は8月に延期されたが、今年は6月27日に開催され、少しずつではあるが活躍の場が戻りつつある。また、白高生へのメッセージとして、「来たる9月3日から開催される予定の白河高校の一大イベント『登龍祭』を絶対に成功させましょう」と語った。

穏やかに語る海津さん

本の紹介

真の幸福とは？

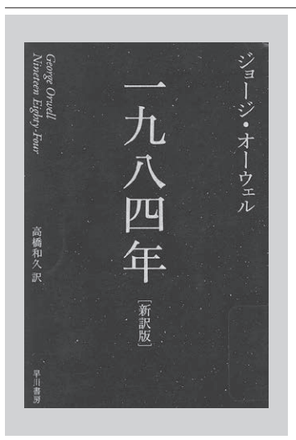
「ユートピア」と対をなす「ディストピア」

ユートピアの対義語、ディストピア。反理想郷とも形容されるこの概念は、産業革命後に発達した。現代において理想郷を実現するためにはどうしたら良いかと問われたならばどう答えるだろうか。科学的な要素が必要となってくるはずだ。ところがこの「反理想郷」を扱った作品は人間を自由にするはずの科学技術に、逆に支配される世界を描いていることが多い。

ジョージ・オーウェルは今からおよそ70年前に「1984年」を執筆した。これは「ディストピア小説の金字塔」とも表現されるだけあって非常に絶望的な内容である。と同時に、「現代社会を予言していたのでは?」とも評価されている。と言うのも、現代の日本は「1984年」の世界観との共通点が多くなりつつあるからだ。

作中では情報改ざんや過度に国民を監視するシステムなどが多く描かれている。あくまでもそれらは「人々が幸福になるための手段」。しかし、本当にそれが幸福と言えるのだろうか。SNSが普及する現代社会でも、デマや出所が不正確な情報は問題になっている。果たして我々は幸福への道を歩んでいるのだろうか。

この作品を読むにあたって、現代と比較してみるのも一つの楽しみだと思う。



ちょっと一息

脳の血流量が増加することが、光トポグラフィー（NIRS）技術を用いた調査で分かっている。NIRS技術とは、近赤外光の、人体を通り抜けるがヘモグロビンには吸収されるという特性を利用して脳内のヘモグロビン量を計測するという技術である。運動をすることで脳の血液量が増加するということは、我々は運動によって新鮮な酸素を脳に供給することができるということだ。また、運動後の記憶力の向上も認められており、運動によってやる気ホルモンと呼ばれるドーパミンが生成されることも知られている。運動をすることは脳にとって良いことであるのだ。

では、実際にどのような運動をした方がよいのか。運動の強度を3段階に分けて運動後に注意力をテストした実験がある。この実験では、中程度の運動の後で最も注意力が高かった。ここにおける中程度の運動とは、被験者が『ややきつい』と答えた運動である。『ややきつい』と感じる程度とは人によって異なるが、勉強の合間に運動をすると考えると、自重の筋力トレーニングがちょうど良いだろう。

以上のように、どのような運動にせよ、勉強の間に運動をすることで、脳を休憩させるだけではなく、脳の働きをさらに活性化させることができる。今度勉強に疲れた時は、是非体を動かしてみてはどうだろうか。

3年生は特にそうだが、白河高校生は、日々勉強に励んでいるだろう。しかし、勉強の合間に休憩しなければ、集中力ももたないし、何時間も勉強することはできない。そこで、休憩の時間に軽い運動を行ってはどうだろうか。

一見、休憩の時間に運動をすることは矛盾しているかのように思われるだろう。しかし、運動によって生活拠点を置き、交通拠点である新白河駅や医療拠点である白河厚生病院へのアクセスを向上させる方針だ。役場から各集落へは、デマンド型交通で村内広域をカバーすることが計画され、現在試験導入されている。また、この計画の注目すべき点は、「村民が安心して暮らせる・交流できるまちづくり」をコンパクト化と同時に進めていることである。行政のコンパクト化に伴い、金融・郵便局等を複合的に設けた役場新庁舎や防災機能をもった公園・駐車場などの大規模整備が行われ、従来の行政施設から住民の交流や憩い、各種情報を提供できる場となることを目標としている。

現時点で、今後道の駅となる「まごと西郷館」、白河消防署西郷分署がすでに建設されており計画が進行している。さらに新庁舎は2023年度中の完成を目指している。行政機能のコンパクト化とそれに伴う利便性・快適性向上によって、西郷村は今後大きく変化することとなる。

村を半世紀支えた現庁舎

変わりゆく西郷村

コンパクト化始まる

西郷村は人口が多く、老年人口も全国平均と比べて比較的低い状態だが、今後は人口減少と高齢化が進むと予想されている。また人口密度が低い西郷村は路線バスの利便性が良くないため、高齢化に伴い、公共交通の利便性向上を図る必要がある。

そこで現在、「西郷村拠点づくりプロジェクト」が進行している。これは自治体の生活機能を1ヶ所に集約し、その拠点へ向かう公共交通を高頻度で運行することによって高齢者の足を確保する、いわゆる「コンパクト化」事業である。コンパクト化はすでに他の自治体で取り入れられており、宇都宮市でもその第一歩として、計画の軸となる次世代型路面電車を建設中である。西郷村では、村役場周辺に行政・防災・福祉施設が集まっている。これは自治体の生活機能をコンパクトにすることで、高齢者の足を確保するとともに、公共交通の利便性を高めるためである。

ひっそりと佇む〝白河史〟の生き証人

学校の正門を出て右に曲がり、突き当たりの丁字路まで進むと、写真のような小さな石柱が立っている。これは、五街道の一つであった奥州街道と、会津藩主保科正之が開削した原方街道とがかつてこの地で分岐していたことを示している。

白河市街地には、曲がり角が多く先が見通せない道が多いが、これは城下町であったことの名残だ。そのため、現在でも当時の雰囲気を味わうことができる。その道の途中に、この石柱は行き交う人々の道標として立ち続けてきた。スマホやカーナビがない時代、その役目は非常に大きかったであろう。

今では決して目立つ存在とは言えないが、白河の歴史を形成してきたことに間違いは無い。

福島に届かぬ「復興五輪」

白高生への調査より

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、実施されるかが不透明だった東京オリンピックは、7月23日に開会式が行われることが決定した。

今大会の誘致で用いられた言葉は「復興五輪」。東京大会を2011年の東日本大震災で甚大な被害を受けた被災地の復興を後押しする大会として位置づけた。方針通り、今大会は福島県をはじめとする被災地を強く意識したものとなっている。聖火リレーは原発事故対応の最前線であったJヴィレッジを出発点とし、ここ白河市も通過した。また、野球やソフトボールの試合の一部は本県でも実施される。

白河高校出版委員会は、本校の生徒が「復興五輪」をどのように捉えているかについて、生徒全員を対象としたアンケート調査を行った。この調査では、「復興五輪」は被災地に経済効果をもたらしていると感じている生徒は39・6％、同じく風評被害払拭に貢献していると感じている生徒は32・7％となった。どちらの指標についても、オリンピックの効果をはっきりと感じている白高生は全体の3分の1程度にとどまっていることが分かった。被災地には、目に見える恩恵が届いていない実態が浮き彫りになった。

編集後記

今回の新聞も、多くの方々のご協力のおかげで発行することができました。改めまして感謝申し上げます。

しかし、私を含めた3年生はこの新聞の作成を以て引退となります。委員が大幅に減ります。出版委員会のピンチです。この仕事に興味のある人は私に声をかけていただくか、出版委員会の公式インスタグラム（@hakko_shuppan）までご連絡いただけると幸いです。よろしくお願いします。

ところで、私は「する論理」に則った委員長たりえたのだろうか。委員たちは優秀で、仕事を率先してこなしてくれた。私は委員会を去るが、次号以降も期待している。

（安藤　要）

【編集員】
3―1　安藤　要
鈴木功冴　仁平鴻成
三澤真澄　吉田祥平
3―3　大和地弘寿
3―4　大塚春佳
2―1　邊見汐里
2―2　菊地未柚
1―1　鈴木　樹
1―2　大竹　翔